



皆さんの足下には

何時代が？

昨年11月に、「アカヒコムラ、みかんの下の弥生時代」を開催しました。

遺跡の発掘調査に携わると、よく「どうして土の中にある遺跡が分かるのですか」と言う質問をいただきます。今回の会期中にも数人の方から同様の質問を受けました。

日本国内で確認されている遺跡は、現在約46万件といわれています。その中で、古墳や城跡などは見てすぐに分かりますが、ほとんどは土の中に埋まっています（土の中の遺跡や土器は埋蔵文化財と呼ばれています）。これらの遺跡はどのようにして見つかるのでしょうか。

遺跡を発見するためには、とにかく土をよく見ます。土が耕され

ると、下に埋まった昔の土器が地表に出てくるからです。つまり、昔の土器がたくさん拾える場所の下には、遺跡がある可能性が高いというわけです。こうした場所を調べる事を遺跡分布調査といいます。

蒲郡市でも、文化財審議会の方々と大学の協力で、過去に分布調査を実施しています。これらの成果を元に、市では遺跡分布地図を作成し、遺跡のある場所では、開発時に調査を行ったりしています。皆さんの家の近くにも遺跡があるかもしれません。もし古い土器を見つけたら、博物館まで教えてください。

さて、平成が終わり、5月1日からは新元号がスタートします。平成23年6月号から始まりました「蒲郡の歴史」も、この形式での掲載は今回で済みです。次回からは、新たな形で蒲郡の歴史や博物館のイベントについてお伝えしていきます。引き続きよろしくお願ひします。



愛知大学考古学研究室「はにわ」学生が行った分布調査の報告書

海のカマキリ「シャコ」

お寿司屋さんに行くと、さまざまな海の幸に出会えます。おいしい寿司ネタの一つ、シャコが好きな方もいるでしょう。ゆでた身は、生のアマエビとは違った食感が楽しめます。一体どんな形をした生き物なのでしょう。

シャコの仲間、英語でマンティスシュリンプと呼ばれています。マンティスとはカマキリのことで、シャコの腕(捕脚)はカマキリのような鎌状です。自分で掘った穴や岩陰に隠れ住み、この捕脚を使って狙った獲物を捕食するのです。シャコはエビと同じ甲殻類の仲間です。シュリンプはエビのことなのです。しかし、同じ甲殻類の中でも、十脚類に含まれるエビとは異なり、十脚類(以下シャコ類)に分類されます。全て海に生息しており、世界で約450種、日本で56種類が知られています。

シャコ類の餌の捕らえ方は①捕脚で挟む②捕脚で叩いて殻を割る③挟んで叩く④②の併用の3タイプに分けられます。②の代表は、サンゴ礁にすむ全長約10センチメートルのフトユビシャコ。捕脚に瘤状の突起があります。捕まえた貝やカニなどを巣穴に引きずり込み、その瘤をぶつけて堅い殻を割るのです。私が大学生の頃、あるテレビ番組の企画で「シャコはガラスを割ることができるの

か？」という疑問の解明に協力したことがあります。大学のシャコ専門家の先生が出演することになったのですが、そのとき、ゼミ生だった私が趣味で飼育していたフトユビシャコも共演し、番組内で見事にスライドガラスを叩き割りました。シャコの力強さがよく分かりますね。

シャコ類の祖先は、古生代石炭紀に出現し、生きた獲物を狙って捕食する甲殻類として進化してきました。その姿は、まさに「海のカマキリ」と呼ぶのにふさわしいでしょう。



鎌状の捕脚をもつシャコの仲間 (セスジシャコ 体長約10センチ)